

# 山形大学附属博物館報 33

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

2007. 3

## 目 次

菊子、「びっくり箱」に入る!!! .....	元 木 幸 一 (1)
博物館と私 .....	近 藤 守 利 (2)
資料紹介 — 東京勧業博覧会全図 — .....	(3)
レファレンス業務 Information Desk .....	(5)
平成18年度事業報告 .....	(6)

## 菊子、「びっくり箱」に入る!!!

元 木 幸 一 (附属博物館館長)

とうとう菊子さんが上野の山にデビューしました。昨年の館報で予告した通り、東京藝術大学大学美術館で、全国の大学博物館の合同展が開催され、そこにわが山形大学附属博物館も椿貞雄の《菊子遊戯之図》を出品しました。その展覧会がThe Wonder Box、つまり「びっくり箱」というのです。

Wonder Boxは、ドイツ語のWunderkammer(驚異の部屋)から借用した言葉です。16-17世紀のヨーロッパの宮廷は世の中の様々な珍品を集め、その部屋を「驚異の部屋」と名付けました。サンゴ、宝石、奇妙な形の石、オルゴールのようなからくり、時計、中国や日本の焼き物等々。その雑多ながらくた置き場が後に美術館、博物館に発展することになります。つまり「驚異の部屋」は美術館、博物館の出発点だったのです。

藝大で開かれた、Wonder Box展も「驚異の部屋」に良く似ていました。入ってすぐのところには宮崎大、名古屋大の直径2メートルもある大きな輪切りの樹木が並んでいます。屋久杉や木曾檜の標本です。それから九州大の縄文人と弥生人の頭骨の群れと隣り合って、広島大の江戸時代の人骨模型が置かれていました。本物の人骨と、木で作ったガイコツが仲良く?鎮座しているのです。奇妙な光景でした。まさしく「驚異」。それからアシカの剥製(鳥根大)やイリオモテヤマネコの毛皮(当然琉球大)など---すみません、途中省略---

そして一番奥に美術コーナーがあり、入ってす

ぐ右手にわが山形大学の《菊子さん》がX線写真と並んで展示されています。それと対をなす左手は東京大学の初代総理(今で言えば総長)《加藤弘之之像》が置かれていました。一番奥は藝大の大きな屏風。さすがの迫力。《菊子さん》は、唯一の油絵でしたので、目立っていましたよ。知り合いの宇都宮市美や足利市美の学芸員、某出版社の編集者などが見てきたよーと連絡をくれ、さすがに奇妙な絵だ、「絵画」ならず、「怪画」だと、ほめて?下さいました。

私は、この展覧会を芸術文化実習の一環として見に行ったのですが、引率した学生たちにも意外に好評でした。前日、国立西洋美術館や東京国立博物館といった大美術館を見てきた目には、かえって美術でない、奇妙なものたちが新鮮に映ったのかもしれない。美術漬けになった目には、「びっくり箱」が驚きをもって受け入れられたのでしょう。さすがにもっともプロらしい大学博物館である(というより唯一のプロの)藝大美術館ですから、展示も巧みでした。見せ方、見る空間によって、こんなに映えるのかと改めて感じ入りました。

わが山形大学も藝大ほどの、とはいわないけれど、せめて天井の高い展示空間が欲しいものだと思ったことでした。私はこの3月で任期を終えます。まことに無念ながら、任期中に施設面での充実はかないませんでした。実は、附属博物館には、帝展特選作を含む、なかなか見事な掛け軸が何点もあります。ところがこれらは天井が低いために学内で展示できないのです。なんと悲しく、寂し

いことではありませんか。せつかくの宝を自分の家の中では見せることができない、それが今の附属博物館、今の山形大学なのです。いずれ、それにふさわしい展示空間ができることを祈って博物館館長としての筆を措きます。祈るしかないのです。

## 博物館と私

近 藤 守 利 (教育学部昭32年3月卒)

私は学校を退職後、ここ10年近く古文書調査のため、山形大学附属博物館に週1回の割でお世話になっている。その度、いつも高橋さんと軽部さんには心よく対応していただき感謝の気持ちで一杯である。また、図書館とその関係の職員のみなさんにも、温かく接していただき嬉しく思っている。博物館へ来ると懐かしく、今ではすでに亡くなられた柏倉亮吉、工藤定雄、長井政太郎の各先生方のこと、そして、歴史研究会の大先輩や仲間のこと、さらに、1976年(昭和51)の内地研修(指導教官工藤定雄先生)の折り、齋藤 光、渡邊 政両氏とともにお世話いただいた故中沢勝麿先生のことをそれぞれ想い出す。それだけに、気持ちも若がり楽しく古文書に向かうことができる。

さて、私が博物館へお世話になってからまとめたレポートには、「羽州街道天童宿駅」「官軍通行による人馬継ぎたて」「立谷川境界紛争一件」「天童織田藩(二万石)家臣の書簡」などがある。これらのレポートは、「郷土てんどう」や「山形県地域史研究」などの機関誌に投稿するとともに、口答で発表している。また、山形近世史研究会(会長横山昭男先生)などでも話題を提供し、指導をいただいている。

そんな中で、ここ4年ばかり、天童市荒谷村形字左衛門家文書にある「天童織田藩家臣の書簡」を、集中的に解読している。村形家は、江戸中期以降ほとんど世襲で名主役を勤めている。しかも、字左衛門の娘お八重の方は、藩主信学の側室で、その子寿重丸は、12代藩主信敏の義弟に当たる。それだけに、天童織田藩と村形字左衛門とは深いつながりがあり、字左衛門へ宛てた家臣の書簡が多かったのも当然と思われる。

ところで、家臣の書簡の中でも、家老吉田三左

衛門の書簡が15通ととっても多かった。

そこで、三左衛門の書簡の一端を紹介し、私なりの思いをまとめてみたい。

まず三左衛門書簡を目にした時思ったことは「むずかしい」の一言であった。これでは、解読に挑戦できないのではと戸惑った。ところが、幸いなことに、ちょうど先輩の須崎寛二氏が、博物館に勤めていた関係で、早速手助けしていただき、何とか、その後解読に挑戦できたのである。須崎氏にはたいへんありがたいと思っている。

次に、内容について触れてみたい。15通ばかりの書簡には、「味そを煮る大豆」「山いも」「荳油」「姫胡桃」あるいは「桑、垣根、花壇などの手入れのための人足」など、日常生活に必要なものを頼んでいるもの、その外、「藩の講のこと」「家臣や藩などの情報」「法事や節句のこと」そして、「謝礼」や「心情」をしたためたものなど、様々であった。ここからは、三左衛門の生活ぶりや幕末期の藩政、社会に関する意識の動向などが読みとれる気がする。さらに、三左衛門の人柄や思いまでも伝わるような気がしてくる。それだけに、むずかしい中にも、読みへの意欲が高まるのを覚える。

三左衛門の書簡には、しみじみと心情を吐露したものがみられる。その一部を紹介すると「～朝廷からの慈悲の心と仰ぎ、勅命を敬うことこそ仏の道である」と、死を覚悟したと思われる表現がみられ、終わりには、「御懇意のあまり心中を申入候」とある。まさに、三左衛門の悟りと思えることを綴っている。別の書簡には、「～むりの元気はあしく候ハ、～」と年老いた字左衛門の体のことを気づかっている。そして、三左衛門はどんな小さなことでも感謝の思いを間をおかず伝えている。

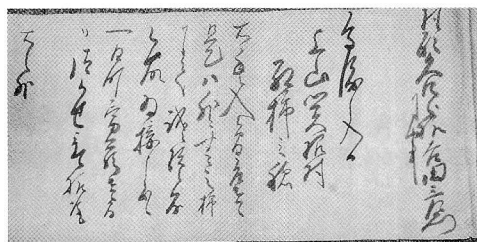
15通の三左衛門の書簡からは、公職にある家老としての三左衛門、誠実で、やさしく温もりのある人間三左衛門の人柄の一端を垣間見る思いがする。しかも、美しい流ちょうな書体は読み手を魅了する。そして、解読力を高め、書簡の様式などを学ぶ機会ともなっている。書簡との出会いは、私にとって大きな喜びとなった。

これらの書簡については、みんなで作る市民の雑誌『天童・ひろば』に掲載している。知って

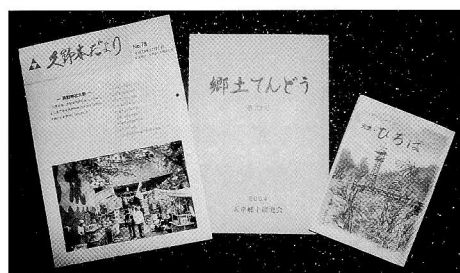
いる人に「ひろば見たよ」などと一こと言われると嬉しくなる。また、天童の古文書研究会で、この家臣の書簡をもとに楽しく学習し合っている。

なお、村形家文書以外の文書の活用では、地区の会報「久野本だより」に「ふる里人物館」として紹介したり、「若松観音開山1300年祭記念誌」などの一部を執筆分担したりしている。

このように、私は博物館所蔵の貴重な文書を活用して、楽しく学習させていただいている。これからも、村形家の文書はもちろんのこと、天童市久野本の青柳家文書にある宝幢寺関係の文書などにも挑戦したいと思っている。これからもよろしくお願ひしたいと思っている。



吉田三左衛門書簡



市民の雑誌「天童・ひろば」など

## 資料紹介

### 東京勸業博覧会全図

東京国立博物館、国立西洋美術館などの文化施設が多数点在する上野公園で、かつて大イベントが開催された。その開催期間は3月20日から7月31日までの約4ヶ月間。総入場者数6,802,768人という記録を残している。この図は1907（明治40）年に開催されたその大イベント、東京勸業博覧会の会場図である。会場の案内図として製作されたイラストマップといったところだろうか。この会場図は嵯峨野平左エ門が2月10日付で発行したも

のである。桜の木々が立ち並ぶ会場とそこを訪れる数え切れない人々が描かれている。

それまでの国内の博覧会としては、1877（明治10）年から5回に渡って政府主催の内国勸業博覧会が開かれている。さらに政府は東京勸業博覧会が開催された1907（明治40）年に第6回内国勸業博覧会を予定していたが、日露戦争の後ということで、財政面で困難だったことと、諸外国の参加を得た万国博覧会にしたいという思惑もあり、これを延期することとした。そこで東京府が代替として開催したのが東京勸業博覧会であった。全く政府の補助を受けない、東京府の負担と市民の寄付金による開催となったが、総入場者数はそれ以前の内国勸業博覧会を大きく上回り、大成功を収めたのである。

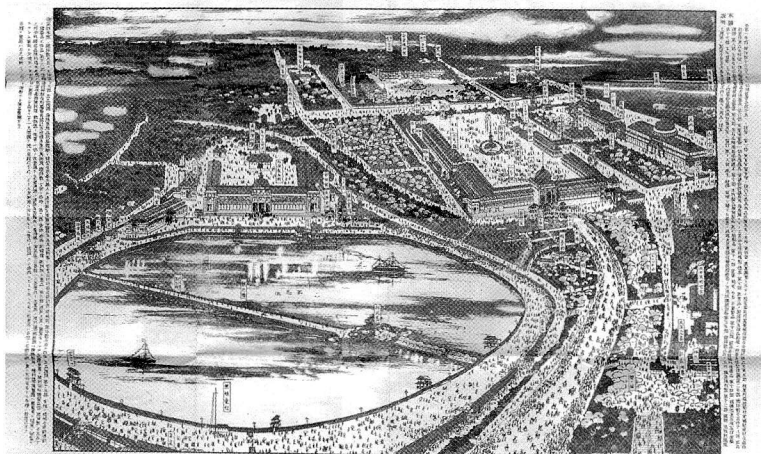
会場は大きく3つに分けられ、上野公園を第1会場（図：右上部）、不忍池畔を第2会場（図：左中央）、帝室博物館の西（図：左上部）を第3会場としている。図の両脇には各会場の面積と展示内容の一部についての紹介文がある。文中には持主が付けたと思われる朱墨か何かの印があり、会場図を眺めながら博覧会への期待を膨らませていた様子が窺える。

第1会場にはローマの凱旋門を真似た正門のある第1号館があり、その奥に第2号館、第4号館が見える。3館の中央には美術学校の製作による高さ21尺（約6m30cm）、直径60尺（18m）の噴水が設置された。美術学校は図中の左上、第3会場のすぐ傍に見られるが、現在の東京藝術大学にあたる。

第2会場には台湾館、瓦斯館（瓦斯会社）、教育水族館、中央には外国製品館、三菱館、機械館などがある。池畔の台湾館はルネサンス、ゴシック風の建築物が多い会場内で、際立って目をひく外観をしており、農産物や鹿皮などの狩猟品、民芸品などが陳列され、2階は喫茶店となっていた。そこから眺める不忍池の眺めは風情溢れるものだったろう。第2会場のほぼ中央の外国製品館には機械、時計、織物、化粧品などの外国製品が陳列された。

第3会場は全て体育会に充てられている。中には室内運動場があり、種々の運動器具が備えられ、希望者は使用でき、見学者は室外からそれを眺め

## 東京勸業博覧會全圖



東京勸業博覧會全圖

るといふものだったようである。吊輪、ローラスケートなど、当時の最新輸入運動器具のみが用意され、日本体育会体操学校教師が指導に当たったという。他に室内遊泳場、館外には弓術場、徒歩打毬の設備が準備された。

会場内にはアミューズメント的なものも用意され、図中には描かれていないが、不忍池にはウォーターシュートが建設された。高さ15mの頂上から斜面に設けられた線路を60m、8人乗りのボートで滑り降りるといふものである。第1会場には観覧車も見られる。

現代においても、博覧会には娯楽的なイメージがあり、お祭り、見世物といった感覚で訪れる人が多いだろう。しかし、そもそも博覧会は文明開化や殖産興業という国家の目標を達成するうえで、啓蒙的な役割を果たすと位置づけられてきた。展示内容を見てみると（図両脇の記述参照）、種々の分野からの模型、物産が集められている。精良の品を一堂に集め、物産に関する知識を深めさせたいという意図が確かに感じられる。第2回内国勸業博覧会では各地方の担当官吏に「観覧客に漠然と看過して幾十日この会場を彷徨とも徒に心目を交わすのみにて何の得る所あらん」との通達を政府は出しており、ただぼんやりと眺めて終わることのないように促している。

図の両脇の記述

右側：「第一号館 総坪敷千九百八十一坪博覧會各館中

第一ノ建物 第一部 教育学藝各種ノ設計及器具用品成績品其ノ方法 第四部 農業園藝ノ凡テノ經營器具作業畜殖保護及各種成績品方 第五部 林業狩猟建築材家橋船車材及森林經營作業品及狩猟ノ模型図画標本方法器具 第六部 水産海産物一切及漁器具 養殖魚貯蔵用法 海産關シテノ工業品及原料模型 標本 第七部 飲食品ノ製造法及現品貯蔵ノ材器具模型標本 第二号館 総坪敷千四百四十八坪 出品 第十七部 土木建築 土木建築ノ作業品及図画模型器具其ノ設計 第十八部 衛生 經濟 救済ニ關スル事業ノ成績及慈悲感化殖民授産ノ方法成績統計 第三号館 総坪敷八百五坪 染色陳列館 第十二部 織物 染物刺繡綿」

左側：「第四号館 総坪敷五百九坪 第十九部 出品種類 海陸軍用品武器艦艇ノ模型及軍事ニ關スル通信衛星地圖海図教育品其ノ他戰事ノ参考品材料器具統計表 器械館 総坪敷五百四坪 出品種類 第十五部 各種ノ器械及原動伝動ノ機器具工作品 第十六部 運輸通信船舶及附属器具設計方法標本等 美術館 総坪敷七百四坪 第二部 東画 西画 彫鑄像 彫刻物工藝品 第三部 建築工業図案及レットル 繪葉書ノ陳列 外国製品館 総坪敷 千五百十二坪 外国出品陳列場水産館ハ教育水産物陳列場 動物館ハ牧畜一切ノ牧養場ナリ 台湾館ハ建築及裝飾共ニ台湾風ノ喫茶店 三菱館ハ三菱会社ノ工業部ノ陳列場 朝鮮館ハ朝国製品ノ陳列場 演藝館ハ観覧車ニ随意ニ観覧ヲナサシム斬新ノ大噴水ハ美術学校ノ製作ニテ高サ二十一尺周圍ノ池ハ直径六十尺 ビール金剛塔ハ大日本ビール会社ノ建設ニテ塔内ニピーヤホール有り飲食店ハ各館ノ右側左側ノ裏ニ市内有名ナル各種ノ飲食店有り 各種ノ売店ハ不忍池畔凡二百廿余軒ニテ現品売捌ナリ」

参考文献

・ 長瀬昭之助「幻の日本大博覧會」『古地図研究』 日



本古地図学会、1996年、p20-31、  
・「東京勸業博覧会（日本の博覧会－寺下勅コレ クション）－（明治時代）」『別冊太陽』、133号、2005年2月、p44-49  
・国書刊行会編『明治時代四季の行楽と博覧会の巻』〈目でみる江戸・明治百科四〉国書刊行会、1996年  
・北澤憲昭『眼の神殿』美術出版社、1989年  
(附属博物館 軽部 早苗)

## レファレンス業務 Information Desk

Information Deskというタイトルをつけ、毎年館報に「館の実務の現状（裏話）」を書き始めてから今年で7回目となる。これまで古文書あれこれ、博物館実習の現状、公開講座開設時の思い出等日常の仕事のあれこれを記してきたが、今回はレファレンス業務について述べてみたい。

レファレンスを辞書で引くと「参照、照会、照合」といった意とある。しかし、多くの方は図書館で文献の調査や情報収集の相談をするコーナー（係）というイメージが大きいのではないだろうか。だが、レファレンス業務はなにも図書館だけのものではなく、博物館・美術館でも重要な仕事として存在する。本館でもレファレンスの件数は多く、それに應えるために使う時間も件数に比例して多いのが実情である。

本館の場合、所蔵する歴史資料・古文書史料の豊富さから、主なる照会は県内の歴史に関することが圧倒的に多い。だが、なかには「カマキリの飼育方法について」「相撲甚句のルーツについて」「碁の歴史について」「チョウチョはなぜ『頭』という単位で数えるのか」など、人文科学系の館員には酷な問い合わせや、「もっと別の然るべき施設に問い合わせた方が…」という質問もあり、2人しかいない館員のうち、たまたま対応してしまったり電話を取ってしまった我が身の不運を嘆くことになる。

これまでで一番の難問は、米国から来学されていた見学者から「私の国では国のルーツに関わる

宗教のキリスト教について、小学校から教育の時間をとり、聖書を読む時間もある。なぜ日本では『神道』について学ばないのか、なぜ『日本書紀』『古事記』等を授業で教えないのか」という質問であった。

神道は、日本の風土に根ざす神々が崇拜の対象となるだけに、体系的かつ客観的に理解し解説することは難しい。教義・教団をうたう新興の宗教とも違い、開祖も存在しない神道は私達日本人の習慣と密接な繋がりを持っている、いわば「伝統的習わし」となっているからだ。「日本では仏壇と神棚と両方持つ家も多い」というようなデリケートな内容を相手に伝える英語力もなく、神道と皇室との関わりにいたればなおのこと正確に伝える知識もなく、沈黙のうち、相手から米国の住所のメモを受け取ることとなってしまった。隠れキリシタン関係の展示資料の解説で「信仰の持つ力」についてお話しした後であったから、自分の解説が引き出した疑問に知らぬ振りはできない。文献や神社本庁への取材で、2ヶ月後にやっと返事を送ったと記憶する。

レファレンス業務については「よろず相談所じゃないんだから、なにもそこまで」という意見もなくはなかったが、レファレンスの後に続く言葉としてサービス（奉仕）というのが世間一般的なとらえ方だとすれば、可能な限り奉仕することも博物館に課せられ使命なのではないだろうか。

館員が手に負えないような内容のレファレンスでも「さあ、わかりません」とは言えない。必ず「〇〇という文献を読まれたらいかがでしょう」「〇〇館ならば詳しい方がいらっしゃいます」といった情報支援を心がけている。本館のような小さな博物館でcurator（学芸員）はsearcher（情報の中から必要とするデータを抽出・提示する職業）も兼ねているのだから。

現在公開されている本館のホームページにしても、公開を目指して準備中の所蔵資料データベースにしても、館の情報発信としての機能と同時に、レファレンスという役目を担って欲しいと願っているところである。

(附属博物館 高橋加津美)

# 平成18年度事業報告

平成18年度に本館で実施した**博物館実習**の単位  
習得者数は下記のとおり。

(単位：人)

学 部	人 数
人 文 学 部	3 6
地 域 教 育 文 化 学 部	2 8
理 学 部	1 7
他 大 学	1
計	8 2

**公開講座**は「山形美術館の傑作たち－6 美術史家の競演－」をテーマに、初めて学外の会場（山形美術館）で開講され、定員の50名を超える受講者で好評を博した。**講師・演題**は下記のとおり。

<b>第1回</b>	11月4日（土）	1コマ 各100分
・クールベ《ジョーの肖像》について 山形大学 助教授 阿部 成樹		
・ロダンの《永遠なる休息の精》 東北芸術工科大学 教授 篠塚千恵子		
<b>第2回</b>	11月11日（土）	1コマ 各100分
・椿貞雄《道》について 山形大学 助教授 小林 俊介		
・ピカソ《マリー・テレーズの肖像》 東北芸術工科大学 助教授 安發 和彰		
<b>第3回</b>	11月18日（土）	1コマ 各100分
・新海竹太郎《聖観音像》について 東北芸術工科大学 助教授 長坂 一郎		

・ピーチの憂愁…

ルノワール《桃》と静物画について

山形大学 教授 元木 幸一

**特別展**は、平成18年10月19日から11月1日まで（土・日を除く）の10日間、「**美の再発見物語：山形大学編**」と題し開催された。

博物館で実施した事業の詳細については、博物館のホームページで随時お知らせしています。是非そちらもご覧下さい。

## 平成17年度見学者総数

一般成人	個人	473人
	団体	85
大学生	個人	1,510
	団体	245
児童・生徒	個人	426
	団体	201
合計	個人	1,996
	団体	531
	総数	2,953

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。  
お気軽に係員までご相談下さい。

山形大学附属博物館報 No.33 2007.3 発行  
 編集兼発行人 山形大学附属博物館  
 〒990-8560 山形市小白川町一丁目4-12  
 (TEL) 023 (628) 4930 (直通)  
 (FAX) 023 (628) 4930  
<http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/>